

百利口語に就いて

潟 岡 孝 昭

百利口語は一遍上人作と伝えられ、「一遍上人語録」に收められている。この語録は一遍上人が、一代聖教皆つきて南無阿彌陀佛になりはてぬとて、遷化之前手自焼却所有書籍^③されたので、後人が上人の遺文遺説を、傳記その他の典籍から編み出したもので、寶曆に刊行せられ(初版)。明和(再版)。文化(三版)の三種の版本が知られている^④。その中、明和本は世に傳わらないが、明和四年(1764)俊鳳の撰した「一遍上人語録諺釋」に引用されている^⑤。

又、百利口語は、元祿四年(1691)量光上人の書寫した「一遍上人行狀讚」が、從來の研究に於いては、最古の寫本とせられていた^⑥。これは一八八句からなるもので、「一遍上人語録」所收の百利口語よりも四句少なく文辭の上にも可成相違がある。又、安永四年(1799)秋上梓せられた、賞山の「百利講略註」引用のものも、語録所收の百利

口語の本文と大差なく、一九二句からなっている。この様に、現在知られている百利口語の本文は、一八八句か、或は一九二句のものである。その外、寛保元年(1779)の序を持ち、寶曆二年(1782)上梓せられた「淨土眞宗聖教目録」に「一遍上人利口一卷」とあるが、これはどのような本文に依つているのか、いまだ明でない。

大谷大學圖書館に「扶説鈔」と題する本がある。室町時代を下るまいと思われる筆寫本である。この本に就いては後日稿を改めて紹介したいと思つてゐるが、その「扶説鈔」の卷頭に「一遍上人利口」と題して、總句數一八四句からなるものが記るされている。但し、この本の初二枚、和讚の前半の七八句目「荒タル所ロ見ユレトモ」までは後人の筆によつて補寫されているのは、誠に

残念な事である。しかし、その缺葉の中、原本の三九句目「貧福共ニノカレ無シ」から、五八句目「妄境フリステ獨ナル」までは、表紙の見返に張込んであり、五九句目「身ト成終ルカナシサヨ」から、七八句目までは、裏表紙の見返に張込んであつた。だが、これに依つて、百利口語は室町時代まで遡る事ができるわけである。

なお、大谷大學圖書館には、「智恩講私記」「善導和尚金剛法師宗論事」「聖徳太子講式」と三つの表題を記した一冊があり、その中にも「一遍上人法話」と題して總句數一八五句からなる百利口語を書寫している。この一冊は、その「智恩講私記」の奥に「于畠安政七庚申年二月佛滅前一日拜寫之 龍昇」とあるから、表題、内容等より推測すれば、江戸の末頃龍昇なる者が、種々の文を雜記したものであるらしい。

左に「扶説鈔」所收の「一遍上人利口」を底本とし、その他の本との差異を下段に掲げよう。但し、繁を恐れて、假名遣、漢字と假名との差異等は省略して、意味の上に差異を來すもののみに限定する。又、「一遍上人語錄」の初版本、及び、再版本は見る事ができなかったので、三版本のみを用いる。

(量) は量光上人筆の一遍上人行狀讃を示す。

(語) は一遍上人語錄(三版)所收の百利口語を示す。

(釋) は一遍上人語錄諺釋引用の百利口語を示す。

(註) は百利講略註引用の百利口語を示す。

(龍) は龍昇筆の一遍上人法話を示す。

因に(語)(註)は平假名、(量)(龍)は片假名を用いている。

一遍上人利口

1 六道輪回ノ間タニハ

2 共ナフ人モナカリケリ

3 獨リ生レテ獨リ行ク

4 生死ノ道コソ悲ケレ

5 或ハ有頂ノ雲ノウヘ

一遍上人行狀讃(量) 百利口語(語)(釋) 一遍上人法話(龍)

1 輪回—生死(量)(龍)

2 共ナフ—伴フ(量) ともなふ(語)(釋)(註)(龍)

3 レ—シ(龍) 行ク—死す(語)(釋)(註)

6 或ハ無間ノ獄ノ下タ
 7 善惡ニツノ業ニヨリ
 8 至ラヌ栖モ更ニナシ
 9 然ヲ人天善處ニハ
 10 生ヲウルコト有カタシ
 11 恒ニハ三途ノ惡道ヲ
 12 栖トシテノミ出テヤラヌ
 13 黑繩衆合ニ骨ヲヤキ
 14 刀山劔樹ニ肝ヲサク
 15 畜生愚癡ノ報モウシ
 16 カハル苦惱ヲ受シ身ニ
 17 且ク三途ヲマヌカレテ
 18 タマ／＼人身得タル時
 19 ナトカ生死ヲ厭ハサル
 20 人ノスカタニナリナカラ
 21 無益ノ希望タヘスシテ
 22 身心苦惱スル事ト
 23 地獄ヲ出タル甲悲ヤアル
 24 物ヲホシカル心根ハ
 25 餓鬼ノ果報ニタカハスヤ
 26 常ニ害心ヲコスコソ

8 栖―處 (量)
 9 ヲ―に (語) (釋) (註) (龍)
 11 恒ニハ―恒に (語) (釋)
 12 ヤラヌ―やらす (量) (語) (釋) (語) カタシ (龍)
 13 キーク (龍)
 14 クーキ (龍)
 14 餓鬼となりては食にうへ 14 15 の間にこの一句がある (量) (語) (釋) (註) (龍)
 16 ニーノ (量) (龍)
 20 スカタ―形 (語) (釋) (註) ナカラ―たれと (語) (釋) (註)
 21 無益―世間 (量) (語) (釋) (語) (龍)
 22 ト―は (量) (語) (釋) (註) (龍)
 23 甲悲ヤアル―甲斐そなき (量) (語) (釋) (註)
 25 タカハスヤ―異ナラス (量) たかはさる (語) (釋) (註) タカハサスヤ (龍)
 26 常ニ―互ニ (量) 迭に (語) (釋) (註) 常ニ害心―害心ツネニ (龍)

- 27 但畜生ニコトナラス
 28 此等ノ妄念起ツ、
 29 明ヌ暮ヌトソメキ居テ
 30 五欲ノキツナニツナカレテ
 31 火宅ヲ出ヌソ憂カルヘキ
 32 千秋萬歳オクルトモ
 33 只幻ノアヒタナリ
 34 ツナカヌ月日スキ行ハ
 35 死期ノ來ラン程ソナキ
 36 生老病死ノクルシミハ
 37 人ヲモ分ヌモノナレハ
 38 貴賤高下モヘタテナク
 39 貧福共ニノカレ無シ
 40 露ノ命ノアルホトソ
 41 玉ノ臺モミカハルハ
 42 無常ノ風タニ吹ヌレハ
 43 花ノスカタモ散リハテハ
 44 父母ヤ妻子ヲ始トシ

- 27 コソ―事(量)(語)(釋)(註)(龍)
 ニコトナラスノ如クナリ(量)
 29 ソメキ居テ―いそく身の(量)(語)(釋)(註) ムメキホテ(龍)
 31 スソ―すは(語)(釋)(註) キーし(語)(釋)(註)
 32 ルトモ―れとも(語)(釋)(註) ル事(量)(龍)
 33 幻―電(語)(釋)
 34 ハ―て(語)
 35 死期―死の期(語)(釋)(註) 來ラン―來ルハ(量)(語)(釋)(註)
 イタラス(龍) ソナキ―もなし(量)(語)(釋)(註) アラシ(龍)
 37 人ヲモ分ヌモノ―人をきらはぬ事(語)(釋)(註) 人ヲ分ヌモノ(量) 人ヲモノ(龍)
 38 高下―上下(量)(龍) モーの(量)(語)(釋)(註)(龍)
 39 貧福―貧富(量)(語)(釋)(註)
 40 ソ―は(釋)
 41 ミカハル、―ミカカルレ(量) みかくへぎ(語)(釋)(註) ミカハル(龍)
 42 風タニ―風ノ(量)(龍) 一度無常の風ふけは(語)(註)
 43 ハテ、―はてぬ(量)(釋)(註) ウセヌ(龍)
 ヤーと(量)(語)(釋)(註) 父母妻子(龍)

- 45 財寶諸從。ニ至ルマテ
 46 百家千○萬○皆ナカラ
 47 我身ノタメト思ヒツ、
 48 惜ミハク、ミ悲メト
 49 此身ヲタニモ打ステ、
 50 神^{タシイ}ヒ獨リ去ントキ
 51 誰カ冥途ニ送ルヘキ
 52 親類眷屬アツマリテ
 53 骸ヲ抱ヘテ叫ヘトモ
 54 業ニヒカレテ獨リ行ク
 55 生死ノ夢ハヨモサメシ
 56 カハル理リ聞シヨリ
 57 微妙ノ寶モヲシマレス
 58 妄境フリステ獨ナル
 59 身ト成終ルカナシサヨ
 60 曠劫多生ノ間ニモ
 61 父母ニアラサル物ソナキ

- 45 從一住(語)
 46 家千萬一計千萬(量) 千萬億(語)(釋)(註)
 47 ノート(龍)
 48 悲メト一悲し(量)(語)(釋)(註)
 50 神一魂(量)(語)(釋)(註)(龍)
 51 ニーヘ(語)(釋)(註)(龍)
 53 骸一死骸(量) 叫ヘ一ナケケ(量) サケフ(龍)
 54 獨リ一迷(量)(語)(釋)(註)(龍)
 57 微妙ノ寶一身命財(量)(語)(註) 身命タカラ(龍) ヲシマレヌ一ホシカラス(量)
 (龍) おしからず(語)(註)
 58 フリステ一共ニ振捨テ(量) 既にふりすてゝ(語)(註) ナル一アル(龍)
 59 この一句なし(量)(語)(釋)(註)(龍)
 b 獨ある身となり果ぬ 59にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)
 c ウキ身トイマハナリハテヌ 59にこの一句がある(龍)
 モーは(量)(語)(註)(龍)
 60 ニアラサルトナラサル(龍) ソナキ一もなし(語)(註)
 61

- 62 萬ノ衆生ヲ友ナヒテ
 63 早ク淨土ヘマイラハヤ
 64 無爲ノ境ニ入ンタメ
 65 捨ゾ誠ノ法恩ヨ
 66 ロニトナフル念佛ヲ
 67 遍ク衆生ニホトコサン
 68 是コソ常ノ栖カトテ
 69 何クニ宿ヲ定メ子ト
 70 サスカニ家ノ多ケレハ
 71 雨ニウタル、事モナシ
 72 此身ヲ宿サンソノホトハ
 73 主モ我身モ同シコト
 74 終ニ打捨テ行ンニハ
 75 アルシ顔シテ何カセン
 76 本ヨリ火宅ト知ヌレハ
 77 燒亡ユケトモサハカレス
 78 荒タル所口見ユレトモ
 79 ツクロウ思モ更ニナシ
 80 疊ミ一テウシキヌレハ
 81 せハシト思フ事モナク

- 62 ヲ友ナヒテ衆生伴ヒテ(龍) 友一伴(量)(釋)(註)
 63 ヘマイラハヤ一にいたるへし(語)(釋)(註)
 65 法一報(量)(語)(釋)(註)(龍)
 67 サン一して(語)(釋)(註)
 68 コソ一らは(釋)
 72 サン一す(量)(語)(釋)(註)(龍) ソノ一コノ(龍)
 73 我身モ一我モ(量)(語)(註)(龍)
 74 打一スリ(龍) ン一身(龍)
 77 ユケ一すれ(量)(語)(註)
 78 見ユレトモ一ミルカトテ(龍)
 79 思モ一心モ(量) 心更に(語)(釋)(註)
 81 ク一シ(量)(語)(註)(龍)

101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82
 念佛申テヲキ臥ヌ。
 妄念オコラスマヒカナ
 道場スヘテ入モセス。
 行往坐臥ニ持タルハ。
 南無阿彌陀佛ノ名號ハ。
 合タル此身ノ本意ナリ。
 欲ノ心モ進マ子ハ。
 勸進ヒシリモシタカラス。
 十種ノ不淨ヲハナレ子ハ。
 說法セシトソ誓ヒテキ。
 坊主氣色ヲ好マ子ハ。
 弟子ノ法師モホシカラス。
 誰ヲ何トモ思ハ子ハ。
 人ヲヘタツル事モナシ。
 且ク此身ノアルホトハ。
 衣食ハサスカ離レ子ハ。
 ソレモ先世ノ果報トテ。
 イトナム事モ更ニナシ。
 言ヲツクシテ乞アルキ。
 ヘツラヒモトメ子ヲハ子ト。

101 99 98 97 96 95 94 92 91 90 88 87 86 85 84 82
 テーセハ(量) す(語)(註) ヌーニ(量) は(語)(註)
 入モセスー無用なり(語)(釋)(註)
 タル、ーちたる(語)(註)
 ハーニ(量)
 合タルー遇ヘルハ(量) 過たる(語)(釋)(註) 本意ー本尊(語)(釋)
 欲ー利欲(語)(釋)(註) モーノ(量)(龍) 心進まねは(語)(釋)(註)
 十五(語)(釋)(註)
 シーン(龍)
 坊主氣色ー坊主軌則(量) 法主軌則(語)(釋) 法主儀則(註)
 何トモー檀那と(量)(語)(釋) 誰とも(註) 思ハーたのま(量)(語)(釋)(註)(龍)
 ヘタツルーへつらふ(量)(語)(釋)(註)(龍)
 ハーそ(量)(語)(釋)(註)
 衣食ハーさすかに(語)(註) ハーモ(龍) サスカー衣食は(語)(註)
 ハーと(量)(語)(註)(龍)
 先ー前(量)(釋)(註)(龍) トーニテ(量) そと(語)(釋)(註)
 イトナムーモトムル(龍)
 子ヲハー願は(量)(語)(註) カカハラ(龍)

- 115 有ニマカセテ身ニマトウ
 114 寒サヲフセカン爲ナレハ
 113 古リタルタハミ蓑ノキレ
 112 小袖カタヒラ紙フスマ
 111 煩ヒナキヲ本トスル
 110 人ノ着スルニ随ヒテ
 109 衣裳モ常ニ定メナシ
 108 世間出世モ好マ子ハ
 107 有縁無縁ヲ導カン
 106 死テハ淨土ヘ生ルレハ
 105 飢ヘテ死ニコソセンスラメ
 104 其モ當ラス成リハテハ
 103 サスカニ人コソ供養スレ
 102 ワツカニ命ヲツクホトハ

- 114 寒サヲフセカン―寒サフセカン(量)(語)
 113 タハミ―蓑(語)(釋)(註)
 112 フスマ―衣(量) のきぬ(語)(釋)(註)
 110 随ヒテ―任せつゝ(量)(語)(註)
 109 衣裳モ―衣も(語)(註)
 108 世間―世間の(語)(釋)(註) モ―ヲ(龍)
 107 この一句なし(量)(語)(釋)(註)(龍)
 d 殊勝の事こそ有へけれ 107にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)
 e コレヨリ殊勝ノコトソナキ 107にこの一句がある(龍)
 106 死テハ―死して(量)(語)(註)(龍) へ―に(量)(語)(註) ルレ―れな(量)
 (語)(註)(龍)
 104 當ラス―與ヘス(量) ハテハ―ユカハ(量) 果は(語)(釋)(註) ヌトモ(龍)

- 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116
- 味[○]ヒ求[○]ル事モナシ
善惡トモニ皆ナカラ
輪廻生死ノ業ナレハ
スヘテ三界六道ニ
ウラヤマシキ事更ニナシ
阿彌陀佛^{ホトケ}ニ歸[○]命[○]ゾ
南無阿彌陀佛ト唱ハ
攝取ノ光ニ照サレテ
マコトノ佛[○]ニナル時キハ
- 命ヲ支[○]フ食物ハ[○]
當リ付タル[○]其ノマヽニ
死ヌルヲ歎ク身ナラ子ハ
病ノタメトモキラハレス
ヨハルヲ悲[○]ム身ナラ子ハ

- 129 126 125 121 120 119 118 117 116
- 佛ニ―奉事と(量)(語)(註) 法師ニ(龍)
事―モ(龍)
ノ―して(量)(語)(釋)(註)(龍)
ヒ求ル―ニ求ル(量) たしむ(語)(釋)(註)
願―思(量)(龍)
g 色の爲ともおもはねば 120 121の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)
f 力の爲とも願[○]はれす 120 121の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)(龍)
悲―痛(語)(釋)(註) この一句なし(量)(龍)
この一句なし(量)(龍)
ヌ―す(量)(語)(註)(龍)
タル―ヲソ(龍) この一句なし(量)
支フ―さゝふる(量)(註) さゝゆる(語)(釋) タスクル(龍) ハ―モ(量)(龍)

- 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130
- 觀音勢至^〇ノ友^〇トスル^〇
 同朋求メテ何ニカセン
 諸佛ノ護念シタマヘハ
 一切横^〇難ヲソレナシ
 カ^〇ル理リ知ルコトモ
 ヒトヘニ佛ノ恩徳ト
 思ヘハ歡喜セラレツ、
 彌ヨ念佛申サル、
 一切衆生ノ爲メナラテ
 世ニマシハリテ詮ナサヨ
- 熊野ニ參詣^〇企テ、^〇
 證誠殿ニ申セシニ
 イサ、カ^〇夢想ノ告アリテ
 其レニマカセテ過ル身ノ
 後生ノ爲ニエコモナキ
 物モラウコソオカシケレ
- ソ友トスル^〇ノ友トナス^〇(量)の勝友あり(語)(釋)と勝友す(註)ヲ勝友トス(龍)
 諸佛ノ護念^〇諸佛護念(語)(註)(龍)
 横^〇傍(龍)
 念佛申^〇念佛ソ申(龍)
 爲メナラ^〇爲メナラ(龍)
 ニマシハリテ^〇をめぐりての(量)(語)(註)ニメクリテノ(龍)ナサヨ^〇もなし
 (量)(語)(註)
 一歳熊野ニ詣ツ、(量)(語)(註)企テ、^〇オモヒテ、(龍)
 申セ^〇マフテ(龍)
 イサ、カ^〇あらたに(量)(語)(釋)(註)
 キーシ(量)(語)(釋)(註)
 モラウ^〇オモフ(龍)この一句なし(量)(語)(釋)(註)

159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146
 ソ、ロニ妄念ヲコシツ、
 迷悟ノ差別モ。无モノヲ
 本來成佛。一如ニテ
 ハシメテ修スルト思フナヨ
 無始本有ノ行跡ソ
 他力不思議ノ名號ハ
 心王トモニ利益セン
 生死ノ夢ヲ覺スヘジ
 見聞覺知ノ人。〇〇モ
 不思議ノ功德ナルユヘニ
 ロニトナフル名號ノ
 信セン人モ益アラシ
 カクニハ人トナレル身ヲ
 但シ不淨ヲマロカシテ

168 167 156 155 153 152 151 150 149 148 147 146
 差別モ无―差別无(量)(語)(釋)(註)(龍)
 成佛―佛性(語)(釋)(註) 一如―ヒトツニテ(量)(龍)
 修スルト―修スト(龍)
 行―佛(註)
 心王―信謗(量)(語)(釋)(註) 心謗(龍)
 シーキ(龍)
 人―モ―人もみな(語)(註)
 不思議ノ功德―不可思議功德(語)(釋)(註)
 ノ―は(量)(語)(釋)(註)(龍)
 謗せん人も罪あらし 148 149 の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)
 益―ツミ(龍)
 カクニハ人トナレル―終には土とすつる(量)(語)(註) ツキニハツチトクツル(龍)
 平等利益の爲そかし 145 の所にこの一句がある(語)(釋)(註)
 カ―く(語)(釋)(註)(龍)
 アリト思フ悲シケレ 145 の所にこの一句がある(量)

160 迷フ思ソ不思議ナル

161 然ルニ彌陀ノ本誓ハ

162 迷ノ衆生ニ施シテ

163 鈍根無智ノ爲メナレハ

164 智慧高才モ願ハレス

165 本ヨリ念行多行ニテ

166 行住坐臥ニサワリナシ
167 念佛修行ノモノナレハ

160 迷フ―迷と(量)(語)(釋)(註) 迷ヒ(龍) 思ソ不思議ナル―思悲シケレ(量)

ナル―なれ(註)

163 無智ノ―ヲ(龍)

k 布施持戒をも願はれす 164 165 の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)(龍)

願はれす―撰ネハ(量) ナケカレス(龍)

165 この一句なし(量)(語)(釋)(註)(龍)

l 比丘の破戒もなけかれす 165 の所にこの一句がある(量)(語)(釋)(註) 比丘の

―貧窮破戒(量)

m 定散ともに攝すれは 165 166 の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)(龍)

攝すれは―接すれは(量) サハリナシ(龍)

166 この一句なし(龍)

167 この一句なし(量)(語)(釋)(註)(龍)

n 善モ詮ナキモノナレハ 167 の所にこの一句がある(量)(龍)

o 善惡ともに隔ねは 167 の所にこの一句がある(語)(釋)(註)

p 惡業コトニ好マンヤ 167 168 の間にこの一句がある(量)(龍) シャーレス(龍)

- 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168
- 摠[○]ノ思量ヲト[○]メ子[○]ハ
 無量[○]光佛ト申也
 彼此ノ三業捨離[○]せ子ハ
 佛モ衆生モヘタテナシ
 此法信樂スル時キハ
 難思光トソホメ玉フ
 心モ言モ及ハ子ハ
 無量壽佛ノ名號ハ
 諸佛ノ光明及ハサル
 覺[○]リ心モ絶ハテヌ
 心ノハカラヒタノマ子ハ
 人目ヲカサル事モナシ
 身ノ振舞ニイロハ子ハ
 善根ホシトモ思ハレ[○]ス
 善根ホシトモ思ハレ[○]ス

- 181 180 179 178 177 176 175 172 171 169 168
- 摠[○]すへて(語)(釋)(註)(龍) 子ハーフ、(量)(語)(釋)(註)(龍)
 無量光佛―無礙光佛(語)(釋)(註)(龍) ト申―トモ申(量)
 彼此ノ三業―彼此三業(量)(龍) 三業捨離―三業ヲ捨離(量)
 シーク(量)(語)(註)(龍)
 ハーに(語)(釋)(註)
 難思光―難思光佛(語)(釋)(註)
 この一句なし(量)(語)(釋)(註)(龍)
 迷悟の法にあらされは 175の所にこの一句がある(語)(釋)(註)
 惡業人もすてられす 167 168の間にこの一句がある(語)(釋)(註)
 雜善すへて生せねは 167 168の間にこの一句がある(量)(語)(釋)(註)(龍)
 思ハレス―はけまれす(量)(語)(釋)(註)(龍)
 イロハ―締(量)
 ハカラヒ―振舞(量)(龍)
 リー[○]る(量)(語)(釋)(註)(龍)

182 仰テ佛ニ身ヲマカセ

183 出入ノイキヲ限リニテ

184 南無阿彌陀佛。

182 佛—彌陀(量)

183 出入ノイキ—出入息(量)(語)(釋)(註)(龍)

184 〱—ト唱ヘシ(量)(龍)と申ヘシ(語)(釋)(註)

右の校合によつて、今迄最も古い物として知られてい
た、量光筆の「一遍上人行狀讚」に於いて

イ、「一遍上人利口」にあつて、量光筆の「一遍上人

行狀讚」にない句がある。即ち

59 身ト成終ルカナシサヨ 107 有縁無縁ヲ導カン

117 當リ付タル其ノマヽニ

119 病ノタメトモキラハレヌ

120 ヨハルヲ悲ム身ナラ子ハ

145 物モラウコソオカシケレ

165 本ヨリ念行多行ニテ 167 念佛修行ノモノナレハ

175 心モ言モ及ハ子ハ

等九句である。これ等の數句は、他の寫本、刊本類のそ
れと、やや共通したものがある。又、他方には、

ロ、「一遍上人利口」になく、量光筆の「一遍上人行
狀讚」にある句がある。即ち

a 餓鬼トナリテハ食ニ飢 b 獨アル身ト成果ヌ

d 殊勝ノ事コソ有ヘケレ f 力ノ爲トモ願ハレヌ
g 色ノ爲トモ思ハネハ h アリト思ソ悲シケレ
j 謗セン人モ罪アラシ k 布施持戒ヲモ撰ネハ
l 貧窮破戒モ歎レヌ m 定散トモニ接スレハ
n 善モ詮ナキモノナレハ p 惡業コトニ好マンヤ
r 雜善都生セネハ

等十三句である。これ等の數句も、イの場合と同様に、
他の寫本、刊本類のそれと、やや共通したものがある。

次に「一遍上人語錄」所收の百利口語に就いて述べる
べきであるが、初版本は見る事ができなかったで、こ
こでは省略する。しかし、平田諦善氏の初版本・第三版
學寮本との對校表によると、百利口語の條には、差異の
ある事は紹介されていない。それ故、今は學寮本による
事にする。

ハ、「一遍上人利口」にあつて、學寮本「一遍上人語
錄」所收の百利口語にない句は、前述の(イ)の場合に
於ける五九、一〇七、一四五、一六五、一六七、一七五
の六句で量光筆の「一遍上人行狀讚」のそれよりも三句

少ない。又、

ニ、「一遍上人利口」になく、學寮本「一遍上人語錄」所收の百利口語にある句も、前述の(ロ)の場合に於ける a・b・d・f・g・j・k・l・m・p の諸句と、その外に、

i 平等利益の爲そかし p 善惡ともに隔ねは
q 惡業人もすてられす s 迷悟の法にあらされは
の四句がある。

次に「一遍上人語錄諺釋」引用の百利口語と、「一遍上人利口」の本文に就いて述べるべきであるが、この註釋書は全文を掲げず、語釋を主としているので、断片的にその本文を知りうるのみである。しかし、それ等を通して二者の句の出入をみると、前述の學寮本「一遍上人語錄」所收の百利口語と「一遍上人利口」の場合と同様な事が見られるので、ここでは省略することにする。

又、「百利講略註」引用の百利口語の本文の場合も、前述の學寮本「一遍上人語錄」所收の百利口語と、「一遍上人利口」の場合と同様な句の出入しか見當らないので、これも、今は省略することにしよう。

右に述べた學寮「一遍上人語錄」所收の百利口語と、「一遍上人語錄諺釋」引用の百利口語、及び、「百利講略註」

引用の百利口語の三種の刊本が、「一遍上人利口」の本文に對して三者が共通した句の出入を持つてゐる事は、それ等の底本が、同じ系統の本を用いたからであろう。次に、龍昇の書寫した「一遍上人法話」に就いて見るならば、

ホ、「一遍上人利口」にあつて、龍昇筆の「一遍上人法話」にない句は、前述の(イ)の場合や、(ハ)の場合に於ける五九、一〇七、一二〇、一六五、一六七、一七五の外に、

166 行住坐臥ニサワリナシ

の一句がある。又、他方には、

へ、「一遍上人利口」になく、龍昇筆の「一遍上人法話」にある句がある。即ち、それ等は、前述の(ロ)の場合や、(ニ)の場合に於ける a・f・k・m・n・p・r 等の諸句の外に、

c ウキ身トイマハナリハテヌ

e コレヨリ殊勝ノコトソナキ

の二句がある。

以上、「一遍上人利口」を中心に、他の寫本、刊本類に收められた百利口語を見て、感ぜられる事は、右の三種の刊本所收のものは、同一系統のものをを用いたから、

句の出入は見當らなかつたのであろうが、他の寫本類のそれは、各本文に増減がみられた。これは云う迄もなく、和讃なるものが、諷誦されると云う性格よりして、傳承されて行く間に、句の増減が生じた爲であらう。

百利口語は從來一遍上人作の和讃として、傳えられたが、「和讃史概説」^⑦には、「一遍上人語錄」所收の百利口語に就いて、「文面から見れば明かに一遍上人が此の和讃の作者である様に見える。然し此の和讃を再讀三讀して見ると、此の和讃は上人の作でなく、右の文も一遍上人に假記せんが爲に書いたものの様に思はれる。」と述べられ、二、三の用例を挙げれば、

○千秋萬歲おくれども たゝ電のあひだなり

つなかぬ月日過行ば 死の期きたるは程もなし

○百千萬億皆ながら 此身をだにも打すてゝ

等の諸句を掲げて、文才の豊かな一遍上人作としては、用語に不備な點があり、不雅な言い方が少くないと説明されて居る。

又、元祿四年量光上人書寫の「一遍上人行狀讃」に就いても、多屋博士は「一遍上人の文藝」^⑧に於いて、「語

錄所載のものに依れば、文詞に不備不雅な處が多く、上人の和歌を見た目で見ると、此は到底同じ上人の作とは認め難いと思はれる。最近平田諦善師の好意に依つて、この和讃の元祿四年書寫本を一見するの榮を得た。この寫本は語錄所收本とは、字句に於いて少からぬ差違があり、表題も異つて居て、(中略)予輩が一見した所では、この新資料を用ゐても、百利口語は一遍上人作とは云ひ難い様に思はれる。」と述べておられる。

今ここに「扶説鈔」所收の一遍上人利口に就いて見ても一遍上人らしからぬものがある。たとえば

22 身心苦惱スル事ト

23 地獄ヲ出タル甲悲ヤアル

153 心王トモニ利益セン

154 他力不思議ノ名號ハ

155 無始本有ノ行躰ソ

等の如く、意味の取り難いものがある。この様な點は、前述した諸本を共通してみられるものである。また「一遍上人利口」の

56 カ、ル理リ聞シヨリ

57 微妙ノ寶モオシマレス

58 妄境フリステ獨ナル

59 身と成終ルカナシサヨ

は龍昇筆の一遍上人法話では下二句が

妄境フリステヒトリアル、ウキ身トイマハナリハテヌ

とあり、その他のものの下二句は、

妄境既にふりすてゝ、獨ある身となり果ぬ

となつてゐるが、この四句は、前の句迄に於いて述べて來た意を結んで、自ら發心する意を明そうとする一章であるから、右の諸本の如く、ウキ身でもなく、妄境既ニフリステたのでもなく、カナシムべき所でもあるまい。

又、右に掲げた一遍上人作と傳えられ、「一遍上人語錄」にまで收められた和讃の表題が、本に依つて「一遍上人利口」「一遍上人行狀讃」「百利口語」「百利講」「一遍上人法話」等と異なつてゐるのは、實はこの和讃が一遍上人の作ではなく、その門人が一遍上人の遺徳を偲んで、或時代に上人の教を要約したものを作り、それを諷誦することによつて、上人の遺徳を讃嘆すると共に、時宗の教理を唱導教化する爲のものとしたのであらう。

なお、その成立の時期を推定するならば、ここに紹介した「一遍上人利口」に依つて、室町末頃までは遡る事ができたが、最近紹介された、時宗の和讃集である室町書寫の金蓮寺本^⑩には、百利口語が記載されていない。もし、これが一遍上人作であるならば、恐らく、金蓮寺本の筆者も書寫したであらう。この一事に依つて、百利口語の成立は、室町中頃以後と推して、さして無理とは云

えまい。

以上、「扶説鈔」所收の「一遍上人利口」を紹介するに併せて、卓見の一端を記した。諸賢の御指導を仰ぎたい。

- ① 「一遍聖繪」第十一卷
- ② 「一遍上人語錄諺釋」卷一
- ③ 岩波文庫「一遍上人語錄」緒言参照
- ④ 平田諦善氏「一遍上人語錄の研究」(「一遍上人の研究」所收) 参照

⑤ いま私は、多屋博士が昭和十二年に、長安寺住職平田諦善氏が、靜岡縣西光寺所藏本を筆寫せられたものに依つてその所藏の刊本に校合しておかれたものに依つた。西光寺の本には、左の奥書があるという。

高祖上人行狀之讃。一百八十八句。……世多類本。聚之以而正其不正。書寫之以付屬遺弟未審也。更校合可全自他心行也。且爲報恩。且爲利生。莫忽之也。云爾。

元祿四龍次辛未十二月三日

遍照法窟 沙門量光

⑥ 註④に同じ

- ⑦ 多屋頼俊博士著、後編、鎌倉室町時代の和讃、二七五頁
- ⑧ 一年能野にまうでつゝ 證誠殿にまうせしにあらたに夢想の告有て それに任て過る身の後生の爲に依怙もなし

⑨ 「一遍上人の研究」所收

⑩ 多屋頼俊博士「移動する和讃」國語と國文學 三五卷四號